

漱石「こゝろ」論

——「先生」の悲劇への一視点——

山 本 勝 正

一

作品「こゝろ」（大3）において、「先生」（私）が、Kから、下宿のお嬢さんへの愛を告白された後、Kを出し抜いて、奥さんにお嬢さんとの結婚を申し込む場面は次の如くである。

私は突然「奥さん、御嬢さんを私に下さい」と云ひました。奥さんは私の予期してかゝった程驚ろいた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めてゐました。一度云ひ出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてゐられません。「下さい、是非下さい」と云ひました。「私の妻として是非下さい」と云ひました。（下四十五）

水谷昭夫氏は、この場面を評して、「作品『心』を通じて、或は最も美しい光景であるべきではなからうか。それは多分に古風な情景であるが、それなりに一層ひたむきな先生^{注1}の心が脈打っている。」と述べられている。確かに「こゝろ」において、ある意味で最も感動的な場面であるといえよう。ここで、「先生」は奥さんから、お嬢さんとの結婚の承諾を得るのであり、「先生」の未来は決定するのである。

この場面で見逃せないことは、この時の奥さんの言葉なり、態度である。奥さんは「先生」が「予期してかゝった程驚ろいた様子も見せ」ずに、「本人の意向さへたしかめるに及ばないと明言」（同）するのである。「先生」は結婚の承諾が余りに簡単に得られたので、「事のあまりに訳もなく進行したのを考へて、却つて変な気持にな」（同）るので

ある。これらの事実は、「先生」にこの時までの奥さん、お嬢さんの考えや、気持ちが分かっている事を実示しているといえよう。或いは正確には、ある程度分かっていたのだが、Kの告白の後に分からなくなってしまったといえるかもしれない。その理由については、後に述べるが奥さんは、「先生」とお嬢さんの結婚を考えていたのであり、お嬢さんは「先生」に好意を懐いていたのである。また、奥さんの「本人の意向さへたしかめるに及ばない」という言葉についていえば、そのあとの「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから（同）」ともあわせて考えれば、奥さんが一方的にしている言葉ともとれないことはないが、むしろ奥さんとお嬢さんとの間で何らかの話し合いがあったとみられる可能性の方が強いと考えられる。奥さんが、お嬢さんの「先生」に対する好意をふまえている言葉ととれよう。^注そのような奥さんとお嬢さんの気持ちが分からなかったから、「先生」は、話が訳もなく進行したのを考えて、変な気持ちになったのである。もし「先生」に二人の気持ちや考えが分かっていたのなら、「先生」はKを裏切ってまで奥さんに、お嬢さんとの結婚を申し込む必要などなかったのであり、Kへの罪意識に苦しむ必要などなかったのである。そこに「こゝ

ろ」の悲劇があるといえよう。そのような点から見れば、「先生」が結婚を申し込む場面は、感動的ではあるが、ある意味ではアイロニカルな場面でもあるといえよう。

しかしよく考えてみれば、それまでの奥さんや、お嬢さんの「先生」に対する行動や、態度からみて、結婚申し込みにいたる以前に、「先生」が、奥さんや、お嬢さんの気持ちを知ることが不可能であったとは思えないのであるが、それについて、くわしくは後に述べることにしたい。ただ一つ、ここで述べておきたいことは、「先生」は、奥さんに対して、以前に、次のように思っていたということである。

私は何ういふ拍子か不図奥さんが、叔父と同じやうな意味で、御嬢さんを私に接近させやうと力めるのではないかと考え出したのです。すると今迄親切に見える人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。（下十五）

また、お嬢さんに対しても、

私の煩悶は、奥さんと同じやうに御嬢さんも策略家ではなからうかといふ疑問に会つて始めて起るのです。（同）

と思ひ、結局

二人が私の背後で打ち会わせをした上、万事を遣つてゐるのだらうと思ふと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。(同)

と思つている。奥さんが「策略家」であるかどうかは別として、またお嬢さんに対しては「固く信じて疑はなかつた」(同)ことも事実であるが、ともかく、「先生」は、奥さんとお嬢さんが、自分との結婚を望んでいるということを考えていた筈なのである。その点から考えてみても、この結婚申し込みの場面で、「先生」が奥さんからすぐ承諾をえて、変な気持ちになるのは不思議である。「先生」は自分のそれまでの心すら分かつていないといえよう。

そして、このような「先生」の心のありようは、Kが「先生」に、お嬢さんへの愛を告白した場面にもみられる。その時、「先生」は、「私の予覚は丸でなかつたのです」。(下三十六)といっているが、それ以前の「先生」のKへの嫉妬を考えてみると不思議であるといわざるをえない。森谷篁一郎氏の「私が衝撃をうけた理由はただ一つ、Kの恋は知っていたが、告白されることを予覚できなかったことである。」^{注3}という意見もあるが、やはり土居健郎氏の

彼はあんなにもKとお嬢さんの仲を気にしていながら、Kが自分の恋を打ち明けることを全く予想してい

なかったと見える。これはまことに不思議であるといふ他はない。^{注4}

という指摘の通りであろう。このように自分の心すら分かつていない、それまでどう思っていたかすら覚えていない「先生」に、結婚申し込みの場面までに、他人の心を正確に知ることが不可能であつたのは当然であるといえるかもしれない。

さらにここでもうひとつ問題なのは、「先生」がお嬢さんへの愛を奥さんに告白するに至つた経過である。その時の「先生」の心理である。「先生」のつた行動の意味である。彼がお嬢さんとの結婚を決めたのは、結局、正確には愛そのものでなく、嫉妬によって、「愛の半面」(下三十四)である嫉妬によつていたという事実である。「先生」がお嬢さんに「信仰に近い愛」(下十四)を懷いていたことは事実であるが、Kの告白を聞いた後の「先生」の結婚申し込みは嫉妬によるものといわざるをえないのである。Kの告白がなかったなら、「先生」が奥さんにお嬢さんとの結婚を申し込まなかったのではないかという可能性も否定できない。というのは、それまでの「先生」は

Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑え付けて、一步も動けないやうにしてゐま

した。Kの来た後は、もしかすると御嬢さんがKの方
に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を
制するやうになつたのです。(下三十四)

と考えていたからである。このような状況を「先生」自ら
克服して、お嬢さんとの結婚を決めるに至つたのであれば
問題はないのであるが、「先生」の心にあるお嬢さんへの
愛は否定できないにしても、Kの告白から、Kに対する嫉
妬によつてお嬢さんとの結婚を決めてしまつたのである。
そのような意味で「先生」とお嬢さんとの結婚は愛そのも
のを問うことのないものであつたといえよう。^{注5}ここで、一
応これまでの「先生」の生き方を、愛の問題を中心にして
まとめて見ると、彼は叔父からの結婚の話を愛がないとい
う理由で断つた。そしてお嬢さんとの結婚については、愛
があつても、決心がつかなかつた。しかしKが入り三角関
係を構成することが明白になつてはじめて、愛に嫉妬が加
わることによって、お嬢さんとの結婚を決めたということ
になるのである。

二

それでは、この「こゝろ」という作品において、「先生」、
K、お嬢さん、奥さんの四人の登場人物がお互いをどう

思つていたかを整理してみたい。まず「先生」とKがお嬢
さんをどう思つていたのかをみ、次に、奥さん、お嬢さん
が「先生」とKをどのように思つていたのかを考えてみ
たい。「先生」の遺書である点、「先生」は別として、他の
登場人物については、視点人物の「先生」によるものであ
る点、把握がむずかしいが、可能な限り考えてみたいと思
う。

「先生」はお嬢さんに対して、一時的には既にみた如く、
「策略家」と疑うこともあつたが、「殆ど信仰に近い愛」
(下十四)をもつていたのである。このような「先生」の
思いは、作品「こゝろ」において一貫しているようである。
「先生」が後になつて、お嬢さんと結婚してから「私」に
向かつて、恋は「神聖」(上十三)といっていることから
も明らかである。一方Kについてみると、彼は「道のため」
「精進」(下十九)を、その生き方の中心においている
のである。

道のためには凡てを犠牲にすべきものだと言ふのが
彼の第一信条なものですから、性欲や禁欲は無論、たと
ひ欲を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。

(下四十一)

このような考えのKにとって、お嬢さんを好きになるこ

とは本来ありえないのであり、あつてはならないことであつた。しかし、Kの考えは、次第に変化していくのである。お嬢さんを好きになつていくのである。それにはやはり、「先生」が奥さんとお嬢さんに「あたゝかい面倒を見て遣つて呉れ」(下二十三)と頼んだことや、「蔭へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、成るべくKと話をする様に」(下二十五)頼んだことが大きな原因であろう。「先生」は「彼を人間らしくする第一の手段として、まづ異性の傍に彼を坐らせる方法を講じた」(同)のである。そして、Kのお嬢さんへの「切ない恋」(下三十六)が明確になるのは、Kの「先生」への告白の場面であることに間違ひはない。「先生」によつて、「先生」、K、お嬢さんの三角関係は構成されていったともいえよう。

次に奥さんが、「先生」とKをどのようにみていたかを考えてみたい。「先生」が、奥さんに世話になつてゐるからといつて、帶か反物を買つて遣りたいといった時の事である。

奥さんは自分一人で行くとは云ひません。私にも一所に來いと命令するのです。御嬢さんも行かなくてはいけないと云ふのです。(下十七)

結局三人で買物に行くのであるが、この時の奥さんの行

動は、「先生」を娘の結婚相手として意識している行動であつたといつてよいと思える。そのことは、買物にいった後の次の場面とあわせ考えることによつて、より明確になるといえよう。

奥さんは急に改たまつた調子になつて、私に何う思ふかと聞くのです。その聞き方は何をどう思ふのかと反問しなければ解らない程不意でした。それが御嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかといふ意味だと判然した時、私は成るべく緩くなら方が可いだらうと答へました。奥さんは自分もさう思ふと云ひました。

(下十八)

奥さんが、娘の結婚について「先生」に意見をもとめてゐるのであるが、この事も、奥さんの、「先生」と自分の娘との結婚を考へての行動であると思われるのである。そして、Kを下宿に入れようと、「先生」が言つた時の奥さんの態度も、「先生」を娘の結婚相手として考へてゐるからとの事と考えられる。漱石は、その場面をくり返し書いてゐる。初めは、

私は自分で其男(K)を宅へ引張つて來たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。所が奥さ

んは止せと云ひました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せといふ奥さんの方には、筋の立つた理屈は丸でなかつたのです。(下十八)

の場面であり、次は

前にも話した通り、奥さんは私の此所置に対して始めは不賛成だつたのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、成るべくなら止した方が好いといふのです。(中略) そんな人を連れて来るのは、私の為に悪いから止せと云ひ直します。何故私のために悪いかと聞くと、今度は向ふで苦笑するのです。(下二

十三)

の場面である。奥さんは、Kを下宿に入れようとする「先生」に反対しているが、いまみたように、反対の理由が明確に説明できないのである。やはり、これは、奥さんが「先生」を結婚相手として意識しているからに相違ないともいえる。そういった意味では、「先生」が、奥さんに対して「御嬢さんを私に接近させやうと力めるのではないか」と思うのは間違つてはいないのである。

しかし、奥さんに対して「叔父と同じやうな意味で」と思い、「狡猾な策略家」と思うのは間違つている。「叔父と

同じやうな意味で」というなら、奥さんも財産目当てということになると思うが、漱石がその点については、次の様に書いていることを見逃してはならないであろう。はじめ、奥さんは、下宿人を「俸給が豊でなくつて、已を得ず素人屋に下宿する位の人」(下十二)と思つていたのであり、また「先生」が後にいつているように「妻の家にも親子二人位は坐つてゐて何うか斯うか暮して行ける財産がある」(下五十二)のであり、それなりに財産があつたことが示されている。このような点を考慮に入れば、奥さんが、「先生」を娘の結婚相手として考へていたことは事実であるが、だからといって、奥さんは、「先生」が思うやうな、財産目当ての「狡猾な策略家」ではないと思う。それは「先生」の勝手な思いであると思へる。奥さんが、「先生」を自分の娘の結婚相手として考へて、行動することが必ずしも悪いことではない。むしろそのような事を「策略」としてしかみられない「先生」の心に問題があるのだと漱石は述べていると思う。

それでは奥さんは、Kに対してどう思つていたのか。このことは「先生」を娘の結婚相手として意識しているのであるから、当然Kは問題にしていなくても考えられるが、気がついたところをあげてみる。奥さんが、「先生」とお

嬢さん二人だけで留守にしたことがなかったのに、Kとお嬢さんを二人だけにして留守にする場面（下二十六）があるが、これは松本洋二氏の「御嬢さんの結婚相手としてKは論外であったということだと思われる。換言すれば、Kの性格や日常の態度からみて、彼は安心のできる男であったということではないだろうか。」という指摘の通りである。その他には、「下四十七」でKに「先生」とお嬢さんの結婚のことを平然と話していることや、Kの自殺後の態度からみても、奥さんは、Kをお嬢さんの結婚相手として考えていたことはないし、Kがお嬢さんを好きであったということすら考えていなかったように思われる。

それでは、お嬢さんは「先生」とKをどのように思っていたのであろうか。最近でも、玉井敬之氏の

お嬢さんが二人をどのように思っていたのかは、遺書には当然のことながら、えがかれていない。^{注7}

という意見もある如く、「先生」の遺書の中から、お嬢さんの二人に対する気持ちはとらえにくいのである。しかし、たとえば前述の「先生」がお嬢さんと奥さんと三人で反物を買いにいった後の場面に次の如くある。

御嬢さんは戸棚を前にして坐つてゐました。其戸棚の一尺ばかり開いてゐる隙間から、御嬢さんは何か引

き出して膝の上へ置いて眺めてゐるらしかったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物も御嬢さんのもの同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。（下十八）

既に指摘もある如く、これは、お嬢さんの、「先生」に好意をもっていることのあらわれの表現ととって間違いないであろう。^{注8}

また、お嬢さんが「先生」をみて笑う場面が、「先生」の遺書の中には、何度か描かれているが、特に「下二十六」「下二十七」「下三十三」「四」に注目し、無意識の「先生」に対する嬌態のあらわれであると解釈されたのは、寺田健氏であった。^{注9}無論このようなお嬢さんの笑いが「先生」にとって、自分に対する好意のあらわれとはみえなかったことに間違いはないのだし、それが分かっていたなら、Kを裏切るということも防げたのである。このお嬢さんの笑いについては、ここではくわしく検討することはしないが、ともかく、お嬢さんの笑いは、彼女の「先生」に対する好意の気持ちを表現しているのとれるのである。さらに、これは「先生」の遺書ではなく、お嬢さんの結婚してからの言葉であるが、奥さん（お嬢さん）は、「私」に向かつて、「先生」を「あなたの希望なさるやうな、又私の希望

するやうな頼もしい人だつたんです」(上十八)といっているが、この「頼もしい人」の中に、奥さんのお嬢さん時代の「先生」に対する気持ちがよくあらわれていると思える。このような点から考えれば、お嬢さんが、「先生」に、どれほど自覚していたかの問題は別にして、好意をもっていたことは間違いないといえよう。

それでは最後にお嬢さんは、Kをどのように思っていたのかを考えてみたい。岩上順一氏は、「お嬢さんはKにもひかれていた」^{注10}と述べられ、また米田利昭氏も「Kに好意を寄せ」^{注11}ていると述べられている。確かに、後に述べることにするが、お嬢さんがKをも好いているようにみえる描写がないわけではない。「先生」を好いていることがKを嫌っていることにはならないだけに問題は微妙である。しかし、松本洋二氏の

もし、御嬢さんが少しでも「私」からKの方へと心を傾けていたとしたら、当然Kの自分に対する気持ちに気づいたはずであるし、Kの死に自分たちの婚約のことを多少なりとも結びつけて考えたはずである。しかし、実際には彼女はKを問題にしていなかったたのである。Kの墓に「二人揃つて御参りをしたら、Kが囁喜こぶだらう」(下五十二)という御嬢さんは無邪気

である。また彼女はKの墓を「立派だ」というのだが、Kに彼女が惹かれていたら、そんなことは言えないだろう。さらに、Kの死についても、「何故其方が死んだのか、私には解らないの、先生にも恐らく解つてゐないでせう」(上二十)といったとらえ方しかしてない。要するに、御嬢さんはK自身には関心がなかったといえるのである。^{注12}

という指摘の如く、お嬢さんはKを意識していなかったたであろう。

結局、「先生」もKもお嬢さんが好きであった。奥さんは、お嬢さんの結婚相手として、Kを問題にせず、「先生」を考えていた。お嬢さんは「先生」を好きであり、Kには関心がなかったとなる。このようにまとめてみると、「先生」はお嬢さんと結婚することに何の問題もなかったようである。問題は、確かにその様な状況が「先生」には見えなかったことである。そして、「先生」に見えたことは、皮肉なことに、Kとお嬢さんの不可解な行動であった。

三

「先生」が気にする、Kとお嬢さんの行動が描かれている場面は、一応四つあげられる。まず第一は、「下二十六」

で、Kとお嬢さんが二人だけで留守をしていた場面である。第二は、「下二十七」で、Kの部屋で、Kとお嬢さんの二人が話をしている場面である。さらに第三は、「下三十二」で、「先生」が帰った時、学校を早退したKが、お嬢さんと二人だけで話をしている場面である。そして第四は、「下三十三」で、「先生」が偶然、Kとお嬢さんの二人に往来で、でくわす場面である。「先生」は、これらの場面を体験することによって、お嬢さんの心を疑い、Kに嫉妬するようになるのである。これらの場面について、秋山公男氏は、まず第一の場面について、

奥さんは、御嬢さんと共に先生に嫉妬を起こさせ結婚を決意させるべくKを利用するに至る

のであり、

その策略上、「下女」(同)を伴つて家を空けたと読解すべきである。

と述べられ、さらに第二の場面については、お嬢さんが、Kの部屋に出入する目的は明らかである。『三四郎』の美禰子が三四郎をだしに使って野々宮を牽制したのと同様に、Kを利用して先生に嫉妬を起こさせるべく企まれた「技巧」とみるより他にない。

と述べられ、第三の場面については、

克己心が強く、安易に己れと妥協しないKのことである。学校を早退するからには、余程の異常を覚えていることであつたに相違ない。しかるに横にもならず御嬢さんと談笑しているのを見れば、先生抜きで御嬢さんと話す機会を創るために「休んだ」ものと看做さない訳に行かない。

と述べられ、第四の場面については、

勉強家のKが「時間割」を犠牲にしてまで一度帰宅しておきながら——先生の火鉢には火がなく、Kの「火鉢には継ぎたての火が暖かさうに燃えてゐる」(下三十三)——格別用もないのに外出しているのは頷けない。先生への返事は嘘であろうし、御嬢さんに誘われて出掛けたものと考えられる。^{注13}

と述べられている。秋山公男氏は、お嬢さんの策略、Kの嘘(我執)をこれらの場面に見られている。確かに、これらの場面は、そのようにとれる可能性がないとはいえない。

しかし、そうでないともよみとれるのである。たとえば、第一の場面にしても、前にも述べた如く、奥さんが二人だけにして留守にしたのは、Kは安心できる男であり、結婚相手としては論外であつたからとも考えられるのであ

る。また第二の場面などは、「先生」は、かつて奥さんとお嬢さんに「あたゝかい面倒を見て遣つて呉れ」と頼み、「蔭へ廻つて、奥さんと御嬢さんに、成るべくKと話をする様に」頼んでもいるのであり、その故のお嬢さんの行動ともとれるのである。また第三、第四の場面にしても、Kがお嬢さんを好きになっていることをあらわす行動であるとはいえても、必ずしもKが嘘をついているとはいえないのである。その理由として、まず考えられることは、お嬢さんとの結婚から、自殺に至るまでの「先生」の苦悩が成立しなくなってしまうといえるからである。お嬢さんは純粹であり、少なくとも意識的には純粹であり、Kは「罪のない」(下四十一)、「正直」で「善良」(下四十二)な誠実な男であつたのであり、そうであつてはじめて、「先生」の苦悩、罪意識が成立するのである。これらの四つの場面で、Kとお嬢さんの行動をみて、嫉妬し、疑うのは、むしろ「先生」の、「物を解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたり」(下三)する「他の徳義心を疑ふやう」(同)な心の問題の方が強いと思われる。

だからといって、お嬢さんに関しては、問題がないわけではない。というのは、四つの場面での、お嬢さんのKに対する行動、態度は意識的ではないのであるが、やはり

「先生」に疑いを起こさせても仕方のないような面もあるのである。お嬢さんのとつた行動、態度は、たとえば、Kの部屋にたびたび出入りするような行動や、そのあとの「先生」に対する態度などは、意識的には、そうではなくても、結果的には、策略ではないにしても、真実Kに好意をもっていないのに、Kに対する好意ととられても仕方のないような面もあるのである。そのような意味では、お嬢さんは純粹であつても、それは意識的な次元であつて、無意識的には、それは同時にKの心を迷わすものであつたし、「先生」の心を迷わす行動、態度であつたともいえよう。そのように考えれば、お嬢さんにも罪があつたといえよう。

いまみたような場面によつて、「先生」はお嬢さんの心を疑い、Kに嫉妬するのであるが、もうひとつ「先生」にとつて問題なのは、「先生」は自分がKに及びえないと思つてゐることである。この事実も、「先生」がKを裏切ることの強い要因となつてゐるのである。たとえば、「二十四」では、

Kは私より強い決心を有してゐる男でした。勉強も私の倍位はしたでせう。其上持つて生れた頭の質が私よりもずつと可かつたのです。後では専門が違ました

とあり、「下二十九」では、

とある。これらの表現によつても、明らかなように、「先生」にはKに対する強いコンプレックスがあつた。畑有三氏の

以上まとめると、「先生」は、お嬢さんが好きであり、

お嬢さんも「先生」を好きであつた。奥さんは、「先生」

四

ともかく、Kは自殺し、「先生」はお嬢さんと結婚する

のである。だがその後の「先生」は、遺書の中で、「私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。」(下五十四)といっていることも事実であるが、「私」に向かって「最も幸福に生まれた人間の一对であるべき筈です」(上十)としかいえないのであり、常にKの「黒い影」(下五十五)におびやかされ、人間の罪と向かいあった生活が続けるのである。結局「先生」は「過去」を奥さん(お嬢さん)に打ち明けず、「私」にだけ告白して自殺するのである。ここで問題になるのは、何故「先生」が奥さんに「過去」を打ち明けず、自殺してしまったのかということである。「先生」の自殺の意味については、Kの自殺との関係、「明治の精神」(下五十六)との関係、「私」との関係で、色々の説があるが、ここでは、「先生」の自殺を、奥さんに告白しなかったという点にしばって、従来の説をあげてみたい。

基本的には「先生」が自己の醜惡な姿を妻にみせたくないという恥の意識が働いているのであろうし、「私」の存在も無視できないであろう。まだ十分に整理しているとはいえないが、一応八つあげてみる。まず第一は、乃木殉死批判、乃木大将が奥さんを道連れにして殉死したことに対する漱石の批判がこめられているという説^{注16}。第二は、妻

(お嬢さん)に対する「純白」(下五十二)(下五十六)への願望という説、第三は、見方によっては、第二と同じであるといえるかもしれないが、Kの自殺の原因に妻も関与していたことを知らせることによって、妻を共犯者にしたくなかったとする説^{注17}。第四は、妻には自分の苦悩の意味が理解できないとする説^{注18}。第五は、妻がたとえ許したとして何の解決にもならないとする説^{注19}。第六は、自分とKとの精神的結びつきに妻をかかわらせたくないとする、Kへの殉死とする説^{注20}。第七は、これは作家自身の問題にかかわってくるが、男女の違い、漱石の女性観、漱石の女性に対する不信観のあらわれとする説^{注21}。第八は、より本質的な罪を担いたくなかったとする説^{注22}である。もちろん、このように八つにはっきりと分けることはできないし、八つそれぞれにおいても、作品の内部の問題であったり、作家の問題であったりして微妙な次元の違いが存在すると思えるが、便宜的に分けてみた。

すべての説について検討することはしないが、第二の妻に対する「純白」への願望のため「過去」を打ち明けなかったことについてののみ、すこし考えてみたい。この点については、「先生」自身がいつている言葉であり、問題はないともみえる。たとえば岩上順一氏は、

妻を「純白」な天使と見たがっているからであり、妻をじぶんとおなじ弱味や欠点をもった同等な人間と見ていないからである。^{注23}

と述べられ、また熊坂敦子氏は、

妻を「純白なもの」として眺めるのは、妻の意志や情熱をもった人格を無視した考えである。ここにも先生の個人主義の思いがりが潜在する。^{注24}

と述べられている。ここで問題なのは、漱石は、既にみたように「過去」に、無意識ではあるが、妻（お嬢さん）にも罪があることを述べていた。従って、岩上氏や、熊坂氏のいわれる如く、妻を「純白な天使」「純白なもの」とみているわけではない。「先生」が遺書の最後で「純白」という言葉を使っているのは、たとえば、

妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大変な苦痛だつたのだと解釈してください。（下五十二）

であり、たとえば、

妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、（下五十六）

である。この二つの文章を注意深く読めば、漱石は妻を「純白」といっているのではなく、妻の記憶を「純白」といっているのである。妻はその事に無自覚であるから、妻の記憶を「純白」といっており、「先生」は、自分の妻に罪を自覚させるのに忍びなかつたのであるともいえるのであり、そこに「先生」の妻に対するやさしさもあるといえるのであり、決して妻を罪のない、「純白」な人間とみているわけではないのである。

第二の説以外については、いまのところ十分検討していないが、八つの説の内、第六のKへの殉死とする土居健郎氏の説と、第八の山崎正和氏のいわれる、より本質的な罪を担いたくなかつたとする説^{注25}以外は、それぞれ考えられると思われる。そして、いえることは、「先生」が妻に「過去」を告白しなかつたことについては、意外に色々な見方があるということであろう。そして、「先生」が奥さんに自分の「過去」を告白しないで自殺したことの意味は、唯一の可能性であつた、奥さんとの真の愛の可能性を自ら閉ざしてしまつたことである。

結局「こゝろ」という作品は、「先生」とお嬢さんがお互いにお互いを好きでありながら、いいかえれば、「先生」とお嬢さんの間に愛が問われる状況がありながら、「先生」

がその状況をよめずに、愛そのものでなく、その半面である、嫉妬によって、Kを裏切って結婚を申し込み、そのことの罪意識によって、奥さん（お嬢さん）との間に愛が成立せず、最後は、「先生」の「過去」を打ち明けずに自殺するという行為で、愛の成立の可能性を自ら閉ざしてしまった作品であり、かつての「それから」（明42）のように、多少の問題はあるにしても、本当の意味で、愛が問われることのない悲劇的な作品である。そして、三角関係という点に限っていえば、漱石は「虞美人草」（明40）で藤尾の死を、「それから」では、代助の発狂、三千代の死を予感させる結末を描いたが、漱石はこの「こゝろ」を、三角関係にかかわる、「先生」とKの二人の男性の死という、愛の悲劇を極限まで問いつめてしまった作品としたのである。

最後に、くり返しになるが、「こゝろ」の「先生」の悲劇は、Kを裏切ってまで、結婚を申し込む必要はなかったのに、そのような状況がよめる可能性があったのに、よめずに、Kを裏切ってしまったところから始まったといえよう。そのような状況がよめなかった「先生」は愚かであるに違いない、もしそのような状況が分かっていたならば、「先生」は悲劇を防げたのである。しかし、人間とは、結

局「先生」のように真実がみえずに、醜いエゴイズムに生きる存在であるといったところに、この作品の意図があったといえよう。「こゝろ」という作品の価値は、愛をめぐっての、人間の愚かな心の動きを見事に描写しているところにあるといえることに間違いはないのである。

注1 「心」の文芸史的意義（『日本文芸研究』11巻2号 関西

学院大学日本文学会 昭和34年6月 四一頁）

2 平岡敏夫氏は「これは一見、親が勝手にきめているように受けとる向きがあるが、本人が承知であることがわかっている母のことばである。」（夏目漱石I「こゝろ」 高等学校国語科教育研究講座 第三巻『現代国語』② 小説I『有精堂 昭和50年3月 四五頁』と述べられている。他に、『日本近代文学大系27巻 夏目漱石集IV』（角川書店 昭和49年2月）の遠藤祐氏の頭注（二五五頁）もほぼ同じ意見である。

3 Kの死をめぐる（『国語通信』214号 筑摩書房 昭和54年3月 八頁）

4 漱石の心的世界¹⁰（『解釈と鑑賞』33巻10号 至文堂 昭和43年8月 二〇二頁）

5 ほぼ同様の見解として、土居健郎氏の「漱石の心的世界¹⁰」（前出 二〇四頁参照）、西垣勤氏の「『こゝろ』覚え書」（『日本文学』20巻9号 日本文学協会 昭和46年9月 七四頁参照）、山崎正和氏の「淋しい人間」（『ユリイカ』

- 9 巻12号 青土社 昭和52年11月 六五頁参照)、作田啓一氏の(『個人主義の運命』岩波書店 昭和56年10月 一四〇頁参照) 見解があげられる。
- 6 『こころ』の奥さんと御嬢さん(『近代文学試論』17号 広島大学近代文学研究会 昭和53年11月 一三頁)
- 7 『こころ』二題(『方位』6号 熊本近代文学研究会 昭和58年7月 二頁)
- 8 この場面に注目したものととして、多少の見解の相違はあるが、遠藤祐氏(『日本近代文学大系27巻 夏目漱石集IV』(前出 一一〇〇頁参照)や、松本洋二氏の『こころ』の奥さんと御嬢さん(『前出 一六頁参照)や、秋山公男氏の『こころ』の死と倫理―我執との相関―(『国語と国文学』59巻2号 東京大学国語国文学会 昭和57年2月 二八頁参照)がある。
- 9 お嬢さんの笑い―漱石『こころ』の一視点―(『日本文学』29巻7号 日本文学協会 昭和55年7月)
- 10 『漱石入門』中央公論社 昭和34年11月 一七七頁
- 11 『こころ』を読む(『日本文学』33巻10号 日本文学協会 昭和59年10月 四頁)
- 12 注6に同じ。一七頁
他にほぼ同様の見解としては、寺田健氏の「お嬢さんの笑い―漱石『こころ』の一視点―」(前出 六四頁参照)や、橋本威氏の「『こころ』覚書―「先生」は何故自殺したか―」(『近代文学試論』19号 広島大学近代文学研究会 昭和55年11月 二〇頁参照)がある。
- 13 『こころ』の死と倫理―我執との相関―(前出 二九、三二頁)
- 14 『漱石の『こころ』執筆の意図は、静の「策略」を描くことではなからう。仮にそうなら、Kの死以後の先生の苦悩も死も全てが、女に翻弄された男の物語として、やや滑稽なものとなってしまういさうである。』(山本美苗「夏目漱石『こころ』論―お嬢さんを中心に―」『国文瀾名』4集 常葉学園短期大学国文学会 昭和58年6月 三九、四〇頁)という意見もある。
- 15 心(『国文学』10巻10号 学燈社 昭和40年8月 一一頁)
- 16 駒尺喜美氏の「丸谷さんへの手紙―漱石にとって『こころ』は何を意味するか―」(『展望』128号 筑摩書房 昭和44年8月)や、小泉浩一郎氏の「漱石『心』の根底―明治の終焉―の設定をめぐり―」(『文学・語学』53号 全国大学国語国文学会 昭和44年9月)で、ほぼ同時期に主張され、平岡敏夫氏の「『こころ』の漱石」(『文学』42巻5号 岩波書店 昭和49年5月)で支持された説である。
- 17 小宮豊隆氏の「『心』解説」(漱石全集第12巻『心』岩波書店 昭和31年5月 二二九頁参照)や、玉井敬之氏の「『こころ』をめぐる」(『日本文学』8巻3号 日本文学協会 昭和34年3月 六六頁参照)などがある。
- 18 玉井敬之「『こころ』をめぐる」(前出 二二頁参照)

19 越智治雄「夏目漱石『こゝろ』(4)」(『国文学』14巻8号学燈社 昭和44年6月 一四七頁参照)

20 注4に同じ。二〇四頁参照。

21 『こゝろ』の人物像「明治の精神」と「現代」との関連において(『日本文学』21巻5号 日本文学協会 昭和47年5月 二三頁参照)

また、相原氏は、右の論文で「肯定的契機として『純白』の愛の願望、否定的契機としては不信観をも混じえた女性観であり、」(二二頁)とも述べられている。

22 山崎正和「淋しい人間」(前出 六九頁参照)

また、山崎氏は、右の論文で「あるひは逆に、妻によって現在の罪の意識を一笑に付され、せつかくの自己処罰の根拠を一気に失ふことになるかもしれません。」(六九頁)とも述べられている。

23 『漱石入門』(前出書) 一七八頁

24 こゝろ(『国文学』15巻5号 学燈社 昭和45年4月 一〇八頁)

25 山崎氏は、「先生」がお嬢さんを嫉妬で選びとったことが、最も重大な罪とされているが、私もそれを罪とは認めるが、最も重大な罪とは思われないので、氏の意見には従いたがたい。

(本学助教授)